アジア文化論 II：東南アジア古典文化論 ver2.4

アンコール王朝
- ・アンコール：angkor < nagara （都）
- ・クメール人の王朝の首都、トンレサップ湖の北岸
- ・恵まれた自然環境による高い食糧生産力
- ・デーヴァ・ラージャ（神=王）思想による強力な王権
- ・メコン河流域を拠点にしたタイ湾をめぐる交通の支配
- ・9 世紀初頭から 15 世紀中頃まで。ジャヤヴァルマン 7 世治世に最盛期

《アンコール期以前》

■ 600 年頃-800 年頃　真臘（Chenla）王国
- ・ ヒンドゥー教、とくにシヴァ神信仰、リンガ崇拝。土着の信仰と接合
- ・ 初期王都シュレーシュタプラ（Shrestapura）. 現在のワット・プー寺院遺跡（ラオス、チャンパサック県）。
- ・ サンスクリット、南方ブラーフミー系文字による記録
- ・ メコン川デルタ地域は一時ジャワの勢力下だったと推定される（シャイレーンドラ王朝？）

《アンコール期》

■ 802 年　ジャヤヴァルマン 2 世「世界の王」宣言
- ・ ジャワの支配から独立、クメール王国の再統一
- ・ デーヴァ・ラージャ（devarāja）儀礼
- ・ 王はシヴァ神と同一視され、リンガ（linga）によって象徴される

■ スールヤヴァルマン 2 世（1113-45 年）：アンコール・ワットの建設
- ・ アンコール・ワット：Angkor Wat（王都＋寺院）
- ・ ヒンドゥー教寺院として建立、ヴィシュヌ信仰、一辺 1.3km×1.4km
- ・ 『マハーバーラタ』『ラーマーヤナ』の浮き彫りなど
- ・ その後、16 世紀に仏教寺院に改修、本堂のヴィシュヌ神像が仏像に置換される
- ・ 1632 年、日本人森本右近太夫一房が参拝（インドの祇園精舎と勘違い）

■ ジャヤヴァルマン 7 世（1181-1201 年）：アンコール・トムの建設
- ・ アンコール・トム：Angkor Thom（王都＋大きい）
- ・ ジャヤヴァルマン 7 世は大乗仏教を信奉、自らを観世音菩薩に描く
- ・ 一辺 3km の堀と高さ 8m の城壁に囲まれた方形の敷地
- ・ 中心にバイヨン寺院（トンレサップ湖でのチャンパーとの水上戦を描く）
- ・ 王の死後、仏教からヒンドゥー教へ回帰（仏像の破壊の痕跡）

■ 1296 年　中国元朝の使節の来訪　周達観『真臘風土記』
- ・ 上座仏教とヒンドゥー教（シヴァ神への信仰）が共存
- ・ 14 世紀後半以降、タイ人の王国が攻勢

■ 1432 年　タイ人のアユタヤ朝、アンコールを攻略
- ・ クメールの王都はプノンペンに移動（以後、カンボジアとして知られる）
- ・ アンコールの文物をアユタヤに移送（アプサラ舞踊も）
- ・ 古典的インド文化はアンコールを経由してアユタヤ王朝に受容される。
- ・ 『ラーマーヤナ』はクメールの『ラーマキルティ』を経てタイの『ラーマキエン』に
- ・ バラモン僧による王の即位儀礼

参考文献

石澤良昭『東南アジア　多文明世界の発見』（興亡の世界史 11）講談社．2009.
周達観・著、和田久徳・訳注『真臘風土記　アンコール期のカンボジア』（東洋文庫）平凡社．1989.
藤原貞朗『オリエンタリストの憂鬱』めこん．2008.

図１（左）　カンボジア
図２（下）　アンコール全体
①　アンコールワット（寺院）
②　アンコールトム（王都）
③　西バライ（人工池）
④　東バライ